

## 目録における漢字取扱いの問題点

### Some Remarks on the Handling of *Kanji* as Catalog Headings

小 林 胖

*Yutaka Kobayashi*

#### *Résumé*

Japanese orthography consists of two entirely different character systems, *kanji* and *kana*. *Kanji*, though borrowed from ancient China, has now two pronunciation systems (both convertible to *kana*) and cannot be arranged in established order. For the purpose of filing catalog entries, Japanese cataloging rules (NCR) require addition of *kana* (or *romaji*) transcriptions at head of each heading (author, title, or subject). Transcription in *kana* is quite effective in determining filing places in a catalog, but *kana* alone is not sufficient to fully recognize personal, corporate, and place names or to exact the meaning of subject headings or titles. In addition, the heading thus produced appears awkward and is cumbersome in searching.

On the other hand, the number of *kanji* to be used in official documents and public education was restricted to '1,850' characters in 1946, and later their individual readings were designated.

Such a situation brings about further questions in catalogs and cataloging. First, a sort of discontinuity of recording and literary assets transferring, and second, complication of transcribing out-of-regulation characters. Japanese family names bear too many extra *kanji* and too many customary readings. In this regard, it is reasonable to separate author catalog from subject one, and if older books abound in the collection, title catalog should also be separated.

For identification and exacting of meaning, the author suggests the heading in *kanji* to be followed by *kana* transcription if necessary.

Arrangement of personal names in *kanji* (without *kana*) is not uncommon and the Tokyo telephone directory and the membership roster of the University Club were taken as example of large-and medium-sized name lists, and some details of arrangement were examined, as compared to a part of book-type catalog of the Tokyo Metropolitan Central Library. Another example was taken from a collective subject index to the 29-volume of "World History."

#### I. 問題の発端

##### A. 日本目録規則の基本思想と用語

##### B. 検索者の立場から考える

---

小林胖：慶應義塾大学文学部図書館情報学科教授

Yutaka Kobayashi, Professor, School of Library and Information Science, Keio University.

## 目録における漢字取扱いの問題点

### II. 漢字制限等について

- A. 文字に関する国家的規制
- B. 規制に対する反論とコメント

### III. 検索論の立場からの NCR

- A. NCR の文字に関する規定
- B. 目録を検索システムとして考える

### IV. 漢字による排列・検索の可能性

- A. 人名ファイルにおける漢字排列の問題
- B. 件名ファイルでは
- C. 書名の取扱い

### V. ま と め

## I. 問題の発端

「日本目録規則1965年版」(修正増補を含む、NCRと略す)を用いる場合、その条項のうち文字の取扱いに関する規定が不足していることにすぐ気がつくであろう。わが国は、いうまでもなく、大へん複雑な文字体系を有し、その上、あるいはそのためにというべきか、文字に関して内閣訓令(および告示)という形での公権力による規制が行なわれているのであるから、図書目録(さらに書誌)における文字の取扱いに関して、どのように、またどんな程度に上記規制がカバーしきれないものがあるのか、あるいは図書および目録の利用者が文字に関してどのような検索・読み取り行動をとるかについて、なお一層の考察が必要であると思われる。

現在までの国語教育および文字環境からみて、一般の利用者・読者は上記規制を中心とする文字づかいをするものと考えてさしつかえあるまい。<sup>1)</sup> 従って、いまここで考察すべきことは次の2点に集約することができる。

a) 当用漢字表(音訓、字体を含む)をこえる文字の取扱い

b) 常用表記法と“かな”表記法との整合

元来、図書館の目録は“図書を迅速適確に検索するためのものである”(NCR序説第1項)とされているが、たとえば「迅速」をどのように評定するか、また「適確」についても、同様であり、以下のべるように、文字づかいの問題を抜きにしては、明確にならないであろう。

#### A. 日本目録規則の基本思想と用語

日本目録規則の1952年と1965年版との冒頭における相違は、後者には総則(第1条以下)の前に序説を設

け、“目録の目的”、“目録の種類”などの項にわかれ、厳密に言えば規定とはならないかもしれないが、文字どおり introductory な導入部としている。この序説および本文というべき総則第1条～5条は、NCRの基本思想を知るうえで最も重要であり、しかも1969年(出版1970)に表面的にはかなりの修正が行なわれているために、本稿の導入部としても、二、三の基本概念および用語について吟味しておく必要がある。

#### 1. “目録の種類”(モト版序説§2, 修正により番号削除)

この項は明らかに修正によってわかり易くなっている。これによれば、図書館の目録は

- (a) 著者名から、
- (b) 書名から、および
- (c) 主題から

検索できることとして、それぞれ著者名目録、書名目録、ならびに件名目録および分類目録を対応させている。ここまでは広くコンセンサスが得られるであろう。ただし、筆者の語感からいえば、ここでは“目録”の語を用いなくて、たとえば“ファイル”(目録の部分ファイルの意味で)を用いたいところである。“目録”という語は、後述のように“目録の体系”のために用いたい。

次に、“編成される目録の種類”として先ず“辞書体目録”をあげ、ついで“分類目録”をあげる。(この場合の分類目録は前項という分類目録とは違うものであることは自明である。)叙述の順序に力点をかけば、辞書体目録が推奨されているとも解釈できるし、あるいは、それ程の意識はなく、両者平等であり、便宜上前後となったものとも解される。

NCRにある「目録委員会報告」(p.6)によれば、カード排列規則の一環として、「辞書体目録にたえ得るもの」との方針が立てられて「排列規則(案)」が作られたとあるが、このこと自体は、辞書体目録にたえ得る排列規則は、当然それより小さい諸目録(ファイル)にも適用できるという論理を示すものと解すべきであろう。

このように、「辞書体目録」にこだわるのは、これがわが国の目録の実態からあまりにもかけ離れていて、何らかの意志がなければ、辞書体目録を叙述のうえで先行させる理由が見当たらないからである。むしろ、本稿で以下考察するような点も含めて、目録の構成として諸(部分)ファイルの組合せを示した方がよかったのではあるまいか。

## 2. “標目”

目録における重要な概念である“標目”について、NCRモト版で初出の箇所は序説 §3 の第2項 (p.18) の“件名標目”という複合形であり、単純な形では総則 §2(1) “基本記入”の項である。ここでは“基本記入は、著者名を標目とする著者基本記入か、書名から記入する書名基本記入かのいずれかである。”として出ている。

同(2)項“補助記入”では、

(a) 副出記入: “共著者、協力者などの下に作る記入…; 著者基本記入の場合… **書名から副出記入を作る。**”

(c) 参照記入: “同一著者の別の名称、または、名称の別の形式の下に作る記入は…” となっている。

さらに §3 の終項では

“補助記入は、その図書の主題として扱われた人の名前を**標目とし**、または、主題として扱われた書名を**標目とすることがある。**”〔以上、太字は筆者〕という許容事項がある。

以上の要点は、表現の修正はあるものの、基本的にはモト版と修正版とで変わっていない。

しかしながら、太字にした4種の表現は、大へん微妙であるとしなければならない。即ち、

を標目とする  
から記入する  
の下に作る  
から副出記入を作る。

一方、標目を直接規定するものは総説第3条である。この部分はモト版では7項にわけて羅列した感がある。

(ただし、第7項は型式規定である。) これらの要点を再録すると次のようになる。

- (i) 標目は、記入の最初に記載する。
- (ii) 基本記入の標目は、著者名か、…書名(以下「統一書名」という)かの、いずれかである。
- (iii) 書名基本記入における書名は、標目として扱う。
- (iv) 標目としての著者名は、参照における標目、および……のほかは、すべて統一した形(統一標目)を用いる。
- (v) 団体名が標目の場合には、副標目をつけることがある。
- (vi) 補助記入の標目には、共著者名・協力者名・被伝者名、書名、基本記入の標目となった著者の筆名・別名等がある。
- (vii) 個々の基本記入の標目は、第2章から第10章までの条文によってきめる。

このうち、第1項は第2—6項と比べると、唐突な感じをうけ、従って次のように大きく修正されている:

- (i 修) 標目は、記入の最初に記載し、目録検索上の第1項目となるほか、記入を排列する場合の第1項目となる。

第2項の後段および第3項にカッコつきの注意事項が追加されているが、当面あまり影響がないので省略する。さらに、「用語定義」(p.149)では:

標目 (heading) 記入の最初に記載され、目録の中で記入の排列位置を決定するもの。標目には、個人名、団体名、書名、件名等になる。

この定義と(i 修)の規定を前述の“微妙な表現”のところへフィードバックしてみると、

を標目とする  
から記入する  
の下に作る  
から副出記入を作る

などに書きわけず、すべて“を標目とする”に還元できることがわかる。たとえば、

NCR §2(2)(a) “副出記入”

共著者、協力者などを**標目とする**記入である。…書名を**標目とする**副出記入を作る。

さらに、§12, §22, §42<sup>1)</sup>などの基本的条文はすべて“を標目とする”として表現されていることも一見合致して都合がよい。しかるに、§42(3)の後段、§45, §47, §63の後段、あるいは§65などの“書名から記

## 目録における漢字取扱いの問題点

入する”という表現は、すべて書名基本記入の場合にのみみかわるものであり、前述の筆法をもってすれば、これらの規定も思い切って“を標目とする”としても、定義、規定とは矛盾しない。即ち、記入の最初の位置にあるものはすべて標目であり、最初のない記入はあり得ないからである。

### 3. NCRの規定しないもの

目録規則一般は目録一般の作り方を規定するわけであるが、特殊的にNCRについていえば、“図書の著者書名目録の作り方”に限定される(総則 §1)。一方、「用語定義」の追加によれば“目録”は序説1を参照としている(p.69)。これは冒頭でのべたごとく“図書を迅速適確に検索するためのもの”であって、著者書名目録に限定されない。従って、NCR総則 §1以下が規定する以外の目録の作り方については、別途の規定が必要となることは明らかである。「基本件名標目表」(BSHと略す)は標目表本体およびこれの使用法を解説するが、ポジティブな規則であるとはいえない。

もちろん、NCR序説“目録の種類”後段でいうごとく、“各図書館ごとに定める”べき部分まで規定することはできないし、またすべきではないかもしれないが、少なくとも明確なガイドポストを考える必要があると考える。

### B. 検索者の立場から考える

以上のべて来たように、NCR自体にも新しい疑点が生じる可能性があるが、さらにNCRをこえる総合的なガイドポストが必要であるとすれば、そのひとつのアプローチとして、作成者の立場から全く離れて検索者の側に立って、目録がどのように期待され、使用されるかを考えることも有効な過程となるのではあるまいか。

検索者から見れば、図書館の目録は検索装置の一つにすぎない。より正確に言えば、この目録はその図書館の資料の総体についての完全に、独占的に検索できる装置ではないということになろう。否、とくに学術研究者にとっては、一つの図書館すら完全な情報源ではなく、ネットワークが当然になってきている。

しかし、このように問題を歯止めなしに拡大していても、当面の解決にはならない。それ故、最少限度の拡大として、図書館目録を中心とし、これとの関連において書誌を総合し得る形で考察していきたい。

さて、目録を検索装置としてとらえると、次のような

段階で考えることができよう。

- (i) 目録はマニュアルな検索装置である。
- (ii) そのために、1個または数個の検索ファイルをもち、
- (iii) 各ファイルはマニュアルに接近が可能なように予め排列され、そして
- (iv) その排列(即ち検索)のために、ファイルを構成する各レコードには排列語(検索語)をつける。

ここでいうファイルはNCR序説“目録の種類”でいう著者名目録、書名目録などと等価である。またここでいうレコードは“記入”と等価とする。排列(検索)語はいうまでもなく、“標目”(NCR §3第1項による)である。<sup>2)</sup>

一般の書誌と図書館目録との差は、検索の結果、資料の物的なアドレスを含むか含まないかの差のみにとどめることとする。

マニュアルな検索とは、眼と手で検索するといった常識的な意味に解釈する。

ファイル1を本とするか、複数個にするかにはいろいろな条件が伴う。シングル・アルファベット・ファイルは米国でいう辞書体目録が典型である。排列語(検索語)の記号種が異なる場合には、当然、記号種のカテゴリーの数だけのファイルが少なくとも必要である。

さらに、同一記号種に属する排列(検索)語といえども、

- (i) 検索要求が明らかに異なるか、
- (ii) ファイルが操作上大きくなりすぎるか、
- (iii) レコードの対象とする資料が、その管理上、あるいは利用上、明らかに異なった特性をもつか、あるいは
- (iv) その他の理由、たとえば処理方針の変化、その他歴史的な事情など、

によって分割した、独立のファイルとすることが少ない。

便宜上、本稿では記号種および(i)の条件のみを考慮し、(ii)~(iv)の条件は考えないこととする。

“検索者”としては、我々は当然日本人であり、日本語を用いることを前提とする。ところが、わが国で何かにつけて範とされるアメリカでの目録作りをAnglo-American Cataloging Rules, 1967 (North American Text)の実例から借用して想定してみると、たとえば標目について、若干の規定(翻字など)を補えば、外国語

の標目も自国のファイルに入れることができ、しかも“読めなくとも” 排列・検索ができる装置をつくることのできるのである。

Beaverbrook, Maxwell Aitken, *Baron*  
 Danske videnskabernes selskab  
 Deutscher Buch-Export und  
 -Import, G. m. b. H.  
 Friis Møller, Kai  
 Instituut voor de Tropen  
 Johannes von Holleschau  
 Journal of bacteriology  
 Moskovskii mashinostroitel'nyi trest  
 Nasser, Gamel Abdel  
 Nihon Genshiryoku Hatsuden K. K.  
 Tran-van-Trai  
 Zhongguo wenzi gaige weyuanhui

日本語でも、ローマ字を“標目の読み”に用いれば、一見これに近い形で排列可能となる（上の例、Nihon Genshiryoku...を見よ）。しかし、かな（カタカナ）を標目の読みに用いることは、上の例でも必ずしも整一にはできないものがありそうである（Tran-van-Trai のように）。

いわんや、漢字を標目として用いるファイルにおいては、外国語の読み、読みのカナ表記という二重の手間がかかるために、ローマ字のように“読めなくとも” 排列できる文字に比べて、外国語を含めての統一をとり難いであろう。

外国語（人名、書名など）はさておき、日本語のみに限れば、どうであろうか。これが本稿の主題である。

## II. 漢字制限等について

### A. 文字に関する国家的規制

わが国では、国語表記のために内閣訓令等が制定されており、現在、義務教育、新聞、出版などの面で有効に作用している。その歴史をたどれば明治年代にさかのぼるけれども、いま必要とするものは、戦後制定・改正されたもので、年代的に次のようになる。

昭和21年(1946) 内閣訓令第7号「当用漢字表の実施に関する件」  
 内閣告示第32号「当用漢字表」  
 内閣訓令第8号「現代かなづかい」の実施に関する件  
 内閣告示第33号「現代かなづかい」

昭和23年(1948) 訓令第1号「当用漢字別表」の実施に関する件  
 告示第1号「当用漢字別表」  
 訓令第2号「当用漢字音訓表」の実施に関する件  
 告示第2号「当用漢字音訓表」  
 昭和24年(1949) 訓令第1号「当用漢字字体表」の実施に関する件  
 告示第1号「当用漢字字体表」  
 昭和26年(1951) 訓令第1号「人名用漢字別表について」  
 告示第1号「人名用漢字別表」  
 昭和29年(1954) 訓令第1号「ローマ字のつづり方の実施について」  
 告示第1号「ローマ字のつづり方」  
 昭和34年(1959) 訓令第1号「送りがなのつけ方」の実施について  
 告示第1号「送りがなのつけ方」  
 昭和48年(1973) 訓令第1号「当用漢字音訓表」の実施について  
 「昭和23年内閣告示第2号「当用漢字音訓表」を改定した旨」  
 告示第1号「当用漢字音訓表」  
 訓令第2号「送り仮名の付け方」の実施について  
 「昭和34年内閣告示第1号「送りがなのつけ方」を改定した旨」  
 告示第2号「送り仮名の付け方」

以上のように、漢字については

- (i) その字種を制限し（1850字）、
- (ii) そのうち義務教育で指導すべものを指定し、
- (iii) その「読み」を指定し、
- (iv) さらに字体（一部は簡略化）を定め

ているわけである。また漢字と仮名のインターフェースとして「送り仮名」の問題も整理している。

このような基本的な規制にもとづいて、さらに文部省は小学校学習指導要領（昭和33年）に「学年別漢字配当表」を収め、漢字学習のプログラム化を実施している（昭和36年から）のである。

小学校学年	配当	同累計
1	46 字	
2	105	151
3	187	338

# 目録における漢字取扱いの問題点

4	205	543
5	194	737
6	144	881
備考*	115	996

\*備考は昭和43年に追加されたもの。

また、法制局も「法令用語改正要領」（昭和29年）を  
通達し、このほか文部省等から「公用文作成の要領」（昭  
和27年）、「外国の地名・人名の書き方（案）」（昭和21年）、  
「外来語の表記について（報告）」（昭和27年）など、規制に  
準ずる指針などが出されている。

これらの措置に呼応して、実際に作成された語彙とし  
ては、文部省の一連の「学術用語集」がある。

ある意味でこれらの流れの基本となっている漢字制限  
の考えは、「当用漢字表」に関する昭和21年11月16日  
付の内閣訓令第7号に見ることができよう。

“従来、わが国において用いられる漢字は、その数  
がはなはだ多く、その用い方も複雑であるために、  
教育上また社会生活上、多くの不便があった。これ  
を制限することは、国民の生活能率をあげ、文化水  
準を高める上に、資するところが少くない。”

同様に、同日付の「現代かなづかい」は“表音主義”  
を基本としつつ：

“国語を書きあらわす上に、従来のかなづかいは、  
はなはだ複雑であって、使用上の困難が大きい。こ  
れを現代語音にもとづいて整理することは、教育上  
の負担を軽くするばかりでなく、国民の生活能率を  
あげ、文化水準を高める上に、資するところが大き  
い。”

とそれぞれの理由が述べられている。両者を通じて、一  
口にいえば“能率主義”が横たわっていると、究  
極的には文化水準を高めることをめざしていることは明  
らかである。

これらの国語改革のための訓令が出た昭和21年(1946)  
といえば、終戦の翌年であり、「小説の神様」志賀直哉  
がフランス語を国語にせよという暴論を発表した年でも  
ある。従って“戦争直後のドサクサまぎれにおこなわれ  
たもの”<sup>73)</sup>という早まった判断もまかり通っているけれ  
ども、慶應2年(1866)の前島密の「漢字御廃止之儀」以  
来、福沢諭吉、矢野文雄の漢字制限論があり、文部省と  
しては大正12年(1923)の「常用漢字」1962字、昭和17  
年(1942)の「標準漢字表案」という伏流があったのであ

る。

一方、戦前の義務教育6年間に国語教科書に盛り込ん  
で教えることのできた字数は1300字を多少こえる程度  
であり、このうち児童が書けるようになった字数は、昭  
和10年(1935)東京都における調査で、500字から600字  
であったという。<sup>4)</sup>これに対し、同時代の大西雅雄の「基  
本漢字」の使用度数調査と、戦後昭和31年(1956)の「現  
代雑誌90種の用語用字」調査とでは次のような対比があ  
らわれている。<sup>5)</sup>

大西		雑誌	
上位 200 字	50%(累積)	218 字	54%(累積)
500	71	653	81
1000	79	1010	90
2000	87	1995*	99(9回以上)
3000	91	3328	100

\* このうち「当用漢字表」外の字は375字（使用  
度3.4%）

さらに語彙については、同じく「雑誌90種」調査によ  
って次のようになっている。

		異なり語数	延べ語数
人名・地名		9,599	21,213
一 般	和語	11,134	221,875
	漢語	14,407	170,033
	外来語	2,964	12,034
	混種語	1,826	8,030
記号その他		86	4,950
計		40,016	438,135

記号等、固有名詞、および助詞・助動詞を除けば、  
30,331語であり、そのうち漢語は47.5%を占め、さら  
に混種語のうち漢語を含むものを加えれば恐らく50%  
をこえるであろう。

別に、中学終了者の語彙調査では15人の平均30,000  
語であるが、そのうち全部に共通しているのは12,471  
語であったという。

このような調査データから、多少飛躍した推論が許さ  
れるならば、約15,000～20,000語の語彙に対して最大  
2,000の漢字が対応すると考えることができ、このこと  
は、漢字の組合せによる語が相当数あることを示すもの  
であろう。

たとえば、「新明解国語辞典」が重要語として表示し

た 5,239 語のうち、カン (またはガン) を頭とするものは 62 語 (見出し) があるが、その内訳は次のとおりである:

漢字 1 字	4 語	
1 字+かな	4	
2 字	52	} 53
2 字+かな	1	
かな書き	1	

頭字となった漢字は 30 字であるが、そのうち考 (カンガエ) を別にすれば、音よみの異なり 29 字であり、これが 50 の異なり漢字と組合わせられて 53 語の 2 字語を構成する。29 字の頭字のうち、1 回だけ用いられるものが 15 と過半数を占める。

このように、極めて常識的な推定として、単漢字は組合わせのエレメントとしての意義が大きく、むしろ 2 字づつの語の考察が優先すると考えてよいであろう。<sup>6)</sup>

## B. 規制に対する反論とコメント

言語 (表記) に関して、国家が何らかの規制を試みるということは、常に難しい問題をひきおこすようである。わが国では現在顕在していないが、諸外国で最も多いパターンは、多言語国家における一言語の強制、2 言語 (以上) の併用、少数民族語の復権運動などといった形である。<sup>7)</sup> このような強い規制に比べれば、わが国の規制は、種々の反論がなりたち得るとしても、なお妥協の余地も多いと考えられる。

「当用漢字表」の 1 つの泣き所は固有名詞にある。そのまがきによれば

“この表は、法令・公用文書・新聞・雑誌および一般社会で、使用する漢字の範囲を示したものである。”

“固有名詞については、法規上その他に関係するところが大きいので、別に考えることとした。”

また「人名漢字別表」は

“人名に用いる文字は、国民の生活能率をあげるためにも、また、個人の幸福のためにも、できるだけ常用平易な文字を用いることが必要である。しかしながら、…社会慣習や特殊事情もあるので、…当用漢字表に掲げる漢字のほかに、人名に用いてさしつかえないと認められる漢字を、…”

として追加されたものであるが、これは当用漢字音訓表に含まれていないために、“読みに全く制限がない”ことになる。

もちろん、人名用漢字を含めて、当用漢字は制定以後

に生まれた子供に命名する場合は規制できても (戸籍法施行規則、昭和 26 年)、既に決まっている姓および名には適及できない。地名、機関団体名も同様である。当面の措置として、「公用文作成の要領」4 および 5 において、  
“地名はさしつかえない限り、かな書きにしてもよい。地名をかな書きにするときは、現地の呼び名を基準とする。ただし、地方的ななまりは改める。”  
“事務用書類には、さしつかえない限り、人名をかな書きにしてもよい。…”

としている。実際にどのように励行されているか確かめることができない。感触としては、地名人名をかな書きにすることは、大へん失礼であり、あるいは人定し難いなどの根拠から、いわゆる請求・領収伝票以外には実行されていないのではないと思われる。

戦後の「当用漢字」が、戦前の「常用漢字」と異なっており、成功した大きな因子として、新聞が一せいにこれを実行したことにあるといわれているが、その新聞においても、人名・地名については例外的に漢字主義を守り、表外字を無制限に用いているようである。

従って、漢字問題を考える場合に、一般用語と、固有名詞とは、先ず分離して考察しなければならないわけである。ついでにいえば、「音訓表」の適用も、固有名詞には強制され得ないと解釈される。

## III. 検索論の立場からの NCR

### A. NCR の文字に関する規定

NCR が目録全般でなく、その一部をなす“著者書名目録”のための規則であることは先に述べた (NCR 序説 5)。また個々の“記入”の構成が、標目、記述 (狭義)、物理的記載、注、(ならびにトレーシング) の部分にわかれ、これに応じて規則がグルーピングされていることはいうまでもない。

個々の記入には、検索の第 1 項目とするため標目 (広義) を適当につけて、適当なファイルに排列されるものとする。

ところで、NCR において、文字づかいに関して最も強い規定は第 5 条 (修正あり) である。その基本は条文の最初の 3 行にある。

“標目がかなまたはローマ字以外の文字で記載されているときは、記入の排列および検索の手がかりのために、かなまたはローマ字によってその読みの形を表記するか、または、ローマ字に翻字した形を表記する。…”

## 目録における漢字取扱いの問題点

〔例〕 Kobayashi, Hideo

小林 秀雄

なだ, いなだ

なお“別法”として

“日本人中国人名のように通常漢字で表示される個人名については、かなまたはローマ字で標目を記載する。”

ミヤザワ, ケンジ

風の又三郎

別法はさておき、本則の〔例〕は意味が不明である。

Kobayashi, Hideo に対応するものは Nada, Inada でなければならないし、なだ, いなだに対応するものはコバヤシ, ヒデオでなければ排列のための表記の総合的な例とはならない。

なお、§ 21 “東洋人名”の項では、“朝鮮人名および中国人名は、漢字によって記載する。…”とある。

いうまでもなく、この標目の読みの形は、§ 161 以下に従って排列され、検索にそなえるが、かな排列に関する部分とローマ字排列に関する部分とがわかり易く分離されていないうらみがある。たとえば、§ 164 末項の如く、

“科学記号として用いられている文字等は、ギリシア文字を除いてそのまま排列する。”

Ca, Mg, H<sub>2</sub>O など

ということはローマ字排列のみに関する規定であると思われる。これに対応するかな排列の例もなければ、規定として不備を免がれない。

文字づかいそのものに関する規定は、私見によれば総則に属すべきものであるが、NCRでは第 11 章“図書の記載事項”におしこめられている (§ 81-88)。すなわち、

§ 82 “記載に用いる言語（または文字）は、原則として本文の言語と一致し…”

§ 83 “…表示は図書の表示をそのまま記載する。”

§ 86 “文字を改めるもの”として

(1) 変体がない

(2) 楷書以外の漢字…

などを規定している。

さらに 12 章以下では、エレメントごとの規定がつづき、次のような条項が見られる。

§ 90 “書名は、表示されているままの形を記載し…みだりに変更してはならない。”

§ 99 “著者表示はつぎのように、この表示がないと

誤解を生じやすい場合に限って記載する。

(1) “標目の形と著者表示の形が明らかに異なるとき。ただし、文字の形だけで異なるときは著者表示を記載しない。…”

Maugham, William Somerset

読書案内 世界文学 西川正身訳

注：標題紙の著者表示は「W. S. モーム著」

とあるが記入の著者表示では省略する。

この例は、“文字の形だけで異なるとき…”の例ではないであろうが、大へんあいまいである。

以上は、すべて記載事項に関する規定であって、標目自体の文字づかいに関する顕在した規定が欠如していることになる。

NCRの例から拾うと、次のように一見不統一なものが見出される。

個人名： 柳田 國男 (p. 32, 102)

長澤 規矩也 (p. 80)

団体名： 東京帝國大學 (p. 49)

書 名： 播磨國諸家系圖 (p. 88)

労働科學 } (p. 123)

産業醫學

一方では、

〔国木田独歩〕 (p. 68)

岡沢 鉦次郎 (p. 93)

日本図書館協会 (p. 44)

考古学入門 (p. 95)

名詩名訳 (p. 64)

などの例があり、

さらに、

文藝春秋

東京 文芸春秋社

といった芸のこまかい例すらある (p. 122)。

これらから帰納できることは、“漢字の字体は、その図書に記載されたままとし、みだりに変更しない”ということになる。これもひとつの原則たりうることはいうまでもない。

## B. 目録を検索システムとして考える

目録は検索のためといわれているものの、検索者のためという立場からみると、NCRにはも少し具体的に解釈し直しておかなければならない点が見出される。

### 1. 資料の総体の大きさの規定



昭和 46 年度における大学図書館の和書の蔵書および増加冊数は次のように要約される。<sup>8)</sup>

クラス	蔵書 (1万冊)		増加 (1万冊)	
	国立	私立	国立	私立
A (8学部以上)	100	—	3.2	—
B (5—7)	31.6	27.2	1.2	1.3
C (2—4)	16.9	9.4	0.77	0.50
D (1)	10.9	3.3	0.58	0.19

これに対して、公共図書館の昭和 47 年度 (1972) の統計は次のとおりである。<sup>9)</sup>

	蔵書 1万冊	増加 (1万冊)
都道府県立	14.7	1.1
(同本館当り)	(19.0)	(1.5)
市区立	3.8	0.31

実際には、大学図書館は規模が大きくなるほど (D→A 級)、サービスポイントが分散する傾向がある (国立 D1.3→A18.9; 私立 D1.6→A10.0)。従って、書誌情報の作成・交換・統合に関してかなり複合したシステムが必要であることを予想させる。

公共図書館では、都道府県立は単一組織 34、分館等のあるもの 11 となっている。市立図書館は、人口 10 万を境として、単一組織 (1市1館) に比して、複合組織が増えはじめ、人口 40 万をこえると、複合のものの方が多くなってくる。いうまでもなく、東京都 23 区では、千代田区を除く 22 区では 84 館、即ち 1 区平均 4 館弱という複合組織が常態となっている。

公共図書館では、さらに移動図書館が複合度を高める。

大学図書館に比して、公共図書館 (とくに複合のもの) は、“複本”の率が著しく増えるはずであるが、「日本の図書館」では全く知ることができない。

以上をまとめると、蔵書数 10万～30 万冊、年間増加 0.5 万～1.5 万冊を具体的にイメージとしてもつことができる。もちろん、より大きい図書館はより大きい書誌情報組織との共生関係がでてくるであろう。

## 2. ファイルの分割性

検索のための目録ファイルは、

- (i) 物理的な分割、
- (ii) ファイル特性による分割、あるいは
- (iii) 種々の事情による分割 (未統一)

とが伴う。通常のカード目録では、物理的分割が強く支配する。1冊について最低 3 枚のカードを要するとすれば、10 万～30 万冊の図書について 30 万～90 万枚のカードを要し、通常のカード函に最大限 1000 枚を収容させるとしても、函の数は 300～900 本となる。このことは、検索者が正しく接近できれば、かなりランダムな接近ともなるわけである。

“種々の事情による”分割は、各図書館の歴史的な変遷、組織の複雑性、資料の特性、その他、実例は案外多いようである。

“ファイル特性”としては、NCR “目録の種類”にある如く

著者名ファイル  
書名ファイル  
件名ファイル  
分類ファイル (件名索引)

があるばかりでなく、和漢書と洋書という大きな区別もある。

NCR は実際の個別目録ポリシーを与えるものではないと解されたとすると、実際に図書館の基本ポリシーを決定する場合には、どのような構造をもった目録体系を採るかを当然含んでいなければならない。たとえば、“目録上、和漢書と洋書のカードを同一体系の中に排列するか、または別別に排列するかは、それぞれの図書館の特殊事情を考慮してきめるべき問題である。” (NCR 序説 7 (2))

検索者の立場から、ファイルの分割を考えることもまた必要である。たとえば、大学図書館において、著者か、書名か、あるいは件名かを意識しないで検索することがあるであろうか。もしこれが正確に使われれば、ファイルも分割することが、多少の意味をもって来る。ただし、上記の (iii) 種々な事情による (やむを得ざる) 分割に加えて、さらにファイル特性による分割を行なうことは、6 本、9 本、12 本といったずらにファイル数を増すことになるであろう。

## 3. 検索者の言語環境

現在の検索者は、「当用漢字」で教育をうけ、その「音訓表」によって読むものと仮定する。目録者も同じとする。検索者に与えられる検索ファイル (= 目録) は、予め厳密に排列されているから、検索者はその排列原理に従って、その時の彼の検索語の排列位置と、ファイル内の被検索語の位置との一致又は不一致によって、求める

## 目録における漢字取扱いの問題点

ものの有無を確認する仕掛になっている。

(a) 第1に、排列原理が検索者にとってわかり易いことが必要である。たとえばアメリカにおいて、ABC…を排列原理とすることは、単にその目録についてのみならず、一般辞書において、種々のリストにおいて、不動かつ自明であるといってもよからう。ABC…は単に文字として機能するほかに、順序づける機能をもつわけである。従って、英語にない文字はこれに還元するという手段がとられる。符号付きアルファベットの符号無視、翻字がこれに当る。

わが国では文字として漢字を用い、これは文字としてはアルファベットよりも優れているとの説<sup>10)</sup>もあるが、アルファベットの第2の機能、順序を示すことが単純・一様にできない欠点もある。とくに日本語における漢字は、読みが多様にすぎ、文字だけを排列しても用は全く足りないのである。

このような事情から、一般辞書においても、名簿等においても、かなもじによる中間処理が必要となっている。従って、順序を端的に示す場合には、数字を用いるのが普通であり、以前には「いろは」が若干これに代用された。漢字を順序を示すために用いることは通常なかったのである。

しかしながら、かなを排列に用いたとしても、これは“排列のみ”に用いたのであって、文字としては漢字を用いなければ、ほとんど用が足りないのである。しかも、辞書以外では、排列の中間段階として用いたかなを顯示しないことが多い。即ち、50音順とはいえ、漢字が排列されているのであって、正確にはどう読むかは明示されないのである。

たとえば、ある図書の執筆者が、

牛 窪 浩  
佐 藤 毅  
田 村 栄一郎  
間 宏  
福 武 直

のように呈示されているのは、この例である。この方式が大きくなると、同音または同字が多くなり、純粋なかな排列のほかに、頭字排列も成立ち、いわゆる“電話帳式”のものとなる。

たとえば、

安達  
安部  
安藤

足立  
阿井  
阿久津  
阿部

この例では、安部(アベ)と安藤(アンドウ)とは同じ頭字であるが、その中で(ア)と(アン)とがグループわけされている。

しかし、次の例では、(タチ)、(タツ)、(タテ)というこまかい区別はされていない。

立石  
立岡  
立川  
立田  
立花  
立山

もちろん、頭字の頭音が全く異なる場合は、同一の漢字も、その音に従って、別々にファイルされる。

安立 (ア)  
安井 (ヤス)  
小高 (オ) }  
小山 (オ) }  
小高 (コ) }  
小山 (コ) }

このタイプの読みわけの例は少ないが、電話帳では、直接相互参照 (see also) は作られていない。それ故、ある程度やまかんで別の読みのところをひいてみるしか、方法がない。もちろん、知らない人を電話帳で引くということは、実際にはあまり起らないことである。

しかし、目録または書誌の場合には、正しい読みがわからない著名でも引用などによって引くことは、十分あり得ることである。従って、正しい読みによってふりがなまたはローマ字をふっておいても、実際に検索者が常にそこへ到達できるかどうかの保証はないことになる。

## IV. 漢字による排列・検索の可能性

上述のわずかばかりの例から、漢字排列・検索システムを考える場合に、とくに人名の取扱いの困難が予想できる。これに対比して、件名標目表、具体的には「基本件名標目表」改訂版(B. S. H.)を見ると、まず、文字づかいについて、

- (1) 当用漢字を原則として用いた。
- (2) 外来語は片かなで表わした。

例： アルミニウム．カルタ．ゴム工業

(3) 外来語でない個々の動物名・植物名は平がなを用い、その後に漢字を丸ガッコに入れて示した。

例： か (蚊)．かいこ (蚕)．あさ (麻)

としている。

普通語の件名標目については、日本十進分類法 (NDC) によりかかりすぎて、語自体の scope note がつけられていない場合が若干あり、今後の改善を希望したいところであるが、ここではその一、二の例をあげるにとどめたい。

例 1： 神話 162

→： 伝説

伝説 388 ←口碑

→： 神話，民話

民話 388

→： 伝説 ←昔話

〔伝説と民話は区別できない〕

例 2： 経典 (キョウテン) 183

注： (ケイテン) はない。

件名標目法では、“必要が生じた時は作業者において採択すべきもの”として、

- |               |   |              |
|---------------|---|--------------|
| (1) 個人名       | } | 人名           |
| (2) 氏族名       |   |              |
| (4) 地方名       | } | 地名           |
| (5) 地理的件名     |   |              |
| (6) 日本の旧地方名   |   |              |
| (7) 遺跡名       |   |              |
| (15) 件名としての書名 |   | (地名又は人名を冠する) |

などがあげられている。これらは、要するに人名、地名および書名である。このほかに宗教・教派名、歴史上の事件名、歴史上の建造物名、国際間の団体名なども例示的にあげられ、“必要の生じたつど追加して採択”できる。

問題を簡単にするために、人名、地名、書名に限ることとして考えると、人名、地名は前述の“著者名ファイル”と問題が共通することが多い。書名は正に“書名ファイル”と一致する。NCR序3でいう“著者書名目録”(基本記入目録の意)においては、“書名”は基本記入に限定されるが、ここではもっとソフトに広く解しておきたい。

さて、BSHにおいては、一般件名はよく選ばれていて、その数もあまり多くなく、“件名標目”自体の読み方にはさして難しい点も見受けられず、また極力当用漢

字の範囲におさめているように思われる。当用漢字表にない“表外漢字”もないことはないが(嘯，梵，珙，瑯，治など)、音訓表にない読み(雀ジャン，詞コトバなど)とともに、のちに一括して論ずることとする。

件名標目たり得る個人名は、さし当り人名ファイルの問題点に含めよう。

#### A. 人名ファイルにおける漢字排列の問題

先に若干の例をあげた、人名の排列を少し詳しく検討する。人名ファイルとしたのは、著者名目録の標目、著者副出および分出、件名標目としての人名を含め、人名簿などとの関連も考慮に入れたためである。

わが国で人名が漢字をもって識別されることはいうまでもあるまい。これについて、“当用漢字表”が既使用されている人名(とくに名)と姓については全く適用されないことはすでに述べた。

こまかく区分すれば、

- (i) 表外漢字の扱い
- (ii) 表内漢字の扱い
  - (a) 音訓表外の読み
- (iii) 字体
- (iv) もし“和漢書”目録と考えると、中国・韓国の人名用漢字、字体などの問題も入ってくる。

#### 1. 表外漢字と人名用漢字

現在“人名用漢字別表”(昭26年内閣告示第一号)には、“人名に用いてさしつかえない漢字”として92字が当用漢字に追加されているが、これは当用漢字外であるので“音訓表”が適用されない。即ち、どのように読んでもさしつかえないわけである。(もちろん“読まない”ことは言語として許されないから、何らかの読みが伴うはずである。)

このうちには、むしろ姓によく用いられている、伊、嘉、奈、庄、杉、楠、橘、藤、鎌、鹿などの字があり、これによってたとえば伊藤などという姓が救われることになる。

もし全く機械的に考えるならば、姓名については全部ふりがなが必要であり、多くの書式ではこれを要求しているのも当然のことである。しかしながら、実際には“姓”についてはおのずから使用度の高いものと低いものがあり、また例外的にアテ字の甚しいものもある。

わが国の姓を多い順から10あげると、

鈴木	高橋
佐藤	小林

# 目録における漢字取扱いの問題点

田中 中村  
山本 伊藤  
渡辺 斎藤

のようになるそうである。このあと 25 位までとってみても、“読めない”姓はないといえる。これらの姓を冠する人名は、実際にはこれにつづく名が排列上の役を果たすことが多くなる。このことはいま手許にある「東京都立中央図書館蔵書目録 1966—1970 総記・社会科学」によっても簡単に確認される。

鈴木 72 名  
佐藤 56  
田中 54  
山本 39

この程度では、同姓同名は幸いにも出現していないが、次のように、同音となって末尾の字でようやく区別されるものがある。

鈴木敏夫 山本正男  
敏雄 正雄  
英一 (政夫)  
英市  
道太  
道彦

名のはじまる 3 字目で区別されるもの、あるいは 4 字目で音がかわるものがさらに追加される。

これらのことは、“なるべく早く漢字を呈示する”必要性を示唆する。

次の問題は、これらの有力姓の中に埋没した少数姓の扱いである。

鈴木 ——須々木 1 人  
佐藤 ——左藤 1 人  
渡辺 33 人——渡部 5 人

さらに複雑さを増すのは、佐(サ)、田(タ)のように 1 音の文字は、電話帳式と棒読排列とで、大へん大きな差が出ることである。

また、姓が同音で、文字の組合せがかなり異なるものには

サカイ 酒井  
坂井  
堺  
阪井

のような例が少なくない。

とくに最後の例のような場合に、かな排列ではこれをきめるのが名の読みであり、折角の姓の文字の区別が殺

されてしまうことになる。

名まで含めて考えると、  
佐藤英一郎 (エイイチロウ)  
佐藤英子 (ヒデコ)

のような例も出てくる。

もし目録者が正しい読みをつけても、検索者が必ずしも正しく読まない場合が、とくに名について多いといわれている(音よみをすることが多い)。わが国では名を呼ぶことを避ける傾向が今日でも残っているし、名刺を交換するような職業上の交際では名の読みを確認することは遠慮する。

以上のようないろいろな因子から、先に述べた“なるべく早く漢字を呈示する”目録・検索システムがあってもよいのではないかという主張が、考えられると思う。

なお、上記の目録はタイトル数 14,000 であり、著者名索引に副出が含まれるか否かは明記されていないが、書名索引の半分のページ数しかないこと、ためしに確認したところ訳者名は索引されていないことから、NCR で指定するすべての著者名はカバーしていないものと認められる。もちろん外国著者名(カタカナ書き)および団体著者名を含んでいる。

先に想定した 10 万冊程度の蔵書と、これの大きさのみを比較してみると、約 7:1 となる。従って、個人著者名ファイルとして、この例より 5~10 倍大きくなるものと考えてよいであろう。

いま人名ファイルのモデルとして、「学士会会員氏名録 昭和 48・49 年用」と「東京 23 区 50 音別電話帳 昭和 50 年版 個人名」とを利用することとする。「学士会」は 83,616 名分の名簿であり、例外的にごく少数の外国人名が含まれる程度である。一方、電話帳は昭和 50 年版から個人名と企業名とが分けられて、今回の調査の目的にはかえって便利になった。これは、上下 2 冊、計 3534 ページに上る。1 ページ 4 段組、1 段 141 行であるが、130 名として、1 ページ 500 名、全体で実に 175 万のオーダーに達し、「学士会」の約 20 倍に当る。

多く用いられる姓の上位 10 は次のとおりである。

「学士会」		「電話帳」	
鈴木	982 人	鈴木	71 ページ
佐藤	897	佐藤	58
田中	816	高橋	52
渡辺	720	小林	44
中村	703	田中	42
高橋	687	渡辺	41

伊藤	648	斎藤	38
小林	638	中村	33
斎藤	628	伊藤	33
山本	594	加藤	30

前出の順位と多少の前後はあるものの、傾向としては同じように解してさしつかえあるまい。

「電話帳」はあまりにも巨大であるので、今後は参考にとどめることにし、部分的解析は主として「学士会」によることとする。

#### a) 漢字排列方式と索引

両者とも漢字排列方式をとり、頭音頭字見出し一覧がついている。

「電話帳」では「50 音別索引表」として上巻は“あ～す”，下巻は“せ～わ”が各巻頭にまとめてあり、各排列ページには欄外に漢字見出しをつけている。

「索引」は、まず音順であり、“カ、ガ、か、上、下、……”ではじまり、…雁、鴈、顔、願、釺”で終わっている。しかし、索引の頭字には重出があり、しかも実排列はまた異なっている。

上 (カ)	940	←
下	814	
日	814	
可	814	
甲	934	←
加	814	
加瀬	817	
加藤	818	
加納	847	
仮	966	←
何	849	
花	849	
河	1006	←
佳	849	
：		

(カ) と読む“上”は、ページが先へとんでいることに気付かれるだろうが、“上”の字は

上 (カ)	940	例：上遠野
上 (カス)	940	例：上総
上 (カミ)	940	一略一
上 (カン)	940	例：上林？，上部？

と索引に、読みに従って4回重出するが、実際には漢字“上”(カミ)の所に集め、しかも、(カ)と読む姓は、“上”(カミ)姓の前に排列する。

上代	カジロ
上総	カズサ
上東野	カドノ
上遠野	カドノ (多し)
上三垣	カミガキ？
上見	カミ？
上	カミ
上青木	カミアオキ
上赤	
上明戸	
：	

河 (カ) 1006

河 (カワ) 1006

では、(カ) とよむ場合と、(カワ) と読む場合を混排して、2字目で区別している。

河合	カワイ
河井	カワイ
→ 河西	カサイ
河崎	カワサキ
河島	カワシマ (河“嶋”混排)
→ 河南	カワナミ
河西	カワニシ

角 (カク、カド) も“河西”式である。

角田	カクタ
→ 角谷	カクタニ
角地	カクチ？
角矢	カドヤ？
→ 角谷	カドヤ
角屋	カドヤ

電話帳「索引」の“かの部”の異なり漢字は265字あるが、このうち、たとえば姜、韓などは外国人姓であるかもしれない。

「学士会」では、「難読索引」(画数引き)1ページ、「五十音索引」6ページが巻頭にあるほか、各音のはじめに漢字一覧がつけてある。「五十音索引」には、

“本表は姓の頭字による索引で、数字は頁数を示す。読みにくい姓はその字音か難読索引によって引いて下さい。”

との注意がつけられている。

たとえば、

カ	可	166
	加	166
	何	173

# 目録における漢字取扱いの問題点

香 173, 268  
家 51, 173, 660  
鹿 173, 313

(カ) 音は 166～209 ページにわたるので、この範囲からはみ出した香 268 (コウ), 家 51 (イエ), 660 (ヤ) をも示しているわけである。イエの項では宅 51, 398, 家 51, 175, 660 と、相互参照はよくできている。一番副出が多いのは“生”である。

イク (い, いけ) 生 22, 52, 102, 127, 329, 480, 507

と 7 か所に出ていることが一覧できる。

すなわち,

p.22	生明	アザミ	1	人
52	生悦住	イケズミ	1	
	生駒	イコマ	12	
	生島	イクシマ	11	
102	生方	ウブカタ	5	
127	生石	オイイシ?	1	
	生方	オイカタ	1	
	生出	オイデ	3	
	生沼	オイスマ	1	
329	生源寺	ショウゲンジ	1	
	生野	ショウノ	5	
480	生井	ナマイ	1	
	生井沢	ナマイザワ	1	
	生川	ナルカワ	1	
	生天目	?	1	
	生田目	ナマタメ?	3	
507	生原	ハイバラ	1	

このような相互参照は「電話帳」にはなかったが、それぞれの頭音頭字がわかっているれば探すことができる。“あの部” 生明 (あざみ) と出ている。“いの部” ではイ, イク, イケの 3 か所に重出されている。

電話帳式は漢字を仲介とする相互参照まで手がまわらなかったのかもしれない。“音引” にとられ、“字引” を忘れたというべきか。

「学士会」の“かの部” の異なり漢字は 124 字であり「電話帳」に比べると半分以下になっている。ファイルの大きさとの関連であろう。ちなみに、「都立中央」では外国人姓を除き異なり漢字数は 52 であったから、「学士会」のまた半分以下となっているわけである。さらに、都立中央図書館では、カード目録にはふりがな及びかなの並びを用いているのであろうが、この冊子体目録では、

ふりがなは本体からも、索引からも一切落されていて、とっつきようがない。(なお、香山健一が(カヤマ)と(コウヤマ)の 2 か所に入っているのは単純なミスである)。

このようにファイルの大きさに従って異なり頭字がふえることは、要するに表外漢字および特殊な読みが増えることになると思われるが、果して如何であろうか?

	「都立中央」	「学士会」
当用漢字	26	68
表外漢字	28	53
計	54	121

両者で一致した当用漢字は次の 25 字である。

加	貝	掛	勝	神
何	海	影	門	唐
香	開	春(日)	金	狩
賀	甲	風	兼	河
戒	各	片	上	川

唯一の例外は“掃部”(カモン) が「学士会」の方になかったのみである。“掃部” や“春日”(カスガ) のように、個々の字は当用漢字にあっても、読み方が、文字ごとというよりも、連字として特有の読みぐせがあるものを除けば、上記はまた単字の読みが生き残っていて比較的読みやすいものである。また、「学士会」のリストで追加される約 40 の当用漢字も同様に扱えよう。

表外漢字では

(a) 文字自体が極めて珍しいもの

例: 義 紕 紹 荊 鉦

(b) 姓として珍しいもの

に分けられよう。しかしこれらは出現率が極めて低い。

当用漢字でも、特殊な読みをするものが多少ある。

例: 利 カガ [足利の“利”]

交 カタ

包 カネ

印 カネ

以上の表外漢字および特殊読みには、ふりがながなければ、到底読めないことはいうまでもない。但し、「学士会名簿」程度の大きさのファイルでは、一旦排列されれば、推定して読むことができる場合もある。

蟹沢 カニ

→ 包国 (?)

印牧 (カネマキとふりがなあり)

金井 カナイ (単字として、カネの位置である)

同様に、

楓  
抱  
→ 利部  
鏡

この包および印は、「五十音索引」では

包 ホウ、ツツミ とともになし

印 イン (p.185), シルシ なし

となっているから、索引が不完全で、「包国」は読みがわからなければ検索できないことになる。

〔なお、五十音索引では廿と甘との混乱がみられる〕

以上の読めなくても恥しくない字または姓は出現率も極めて小さいから「例外」として扱うより仕方があるまい。

#### b) 姓の読みと文字との対応

さきに(サカイ)の例をあげ、これが坂井、酒井、境などいく通りにも文字と対応することにふれた。この類の、1音→多字の対応はむしろ予想外に多かったとの感がある。

(カガミ) 加々美, 加々見, 加賀美, 鹿上, 鏡, 各務

(カサイ) 香西, 笠井, 葛西, 河西

(カジ) 梶, 加治, 嘉治, 鍛冶, 鍛治

これと反対に、1字→多音の例として、やはり河西(カサイ, カワニシ)を示したが、この種のものとしては、

香西 カサイ, コウサイ

香山 カヤマ, コウヤマ

垣内 カイト, カキウチ, カキナイ?

角田 カクタ, スミタ, ツノダ

角谷 カクタニ, スミタニ, カドヤ, スミヤ

神代 カミヨ, クマシロ, コウジロ

同字多読の組には、その出現率からみて、殆ど同率の場合と、圧倒的に一方が優勢なペアとがある。「学士会名簿」についていえば、

同率:	香山	カヤマ	6	コウヤマ	5
	門田	カドタ	8	モンデン	7
	金原	カネハラ	9	キンバラ	9
	上村	カミムラ	25	ウエムラ	26
	菅	カン	15	スガ	19
優勢:	海野	ウンノ	22	カイノ	1
	角	スミ	12	カク	2
	角田	ツノダ	52	カクタ	11
				スミタ	10
	勝田	カツタ	22	ショウダ	3
	上田	ウエダ	173	カミタ	6

上原 ウエハラ 46 カミハラ 1  
神戸 カンベ 17 コウド 1

同音多字についてもこのような比較はできるが、くなるので、省略する。

詳細な検討をはぶくと、かな排列は文字の特色を殺し、逆に頭音漢字排列は音の特色を殺すことになり、俗にいうあちらたてれば…という嘆になろう。

## 2. 地名について

わが国では古い地名と姓とのつながりが強いといわれ、垣内はその典型の一つである。<sup>11)</sup>しかし、検索語としては、比較的大きい地名がより多く用いられるかもしれない。「都立中央」の著者索引と書名索引の「か」の部からぬいてみると、

香川\*県

鹿児島\*県

柏\*中学校

神奈川県

金沢\*市, 金沢\*大学

加納\*小学校 (岐阜市)

神出<sup>△</sup>小学校 (神戸市)

鴨川<sup>△</sup>小学校

加茂<sup>△</sup>市, 加茂<sup>△</sup>小学校 (長野市)

刈谷<sup>△</sup>東中学校

川越\*市

川崎\*市

川西\*小学校 (加古川市西小学校の誤り?)

蒲原<sup>△</sup>

以上のうち、\*をつけたものは、人名と一致する部分を示し、<sup>△</sup>は「学士会名簿」にある姓である。これによると、神奈川以外の地名は全部姓と一致する形であることがわかる。いいかえれば、多くの地名は、姓と一致する率が高いことを示唆するのである。

たとえば、栃木県の市、郡名をあげると次のようになる。(符号は上に同じ)

栃木 <sup>△</sup> (県, 市)	大田原 <sup>△</sup>
宇都宮*	矢板 <sup>△</sup>
足利*	黒磯
佐野*	都賀(ツガ)
日光	河内 <sup>△</sup> (カワチ)
今市 <sup>△</sup>	芳賀*(ハガ)
小山*(オヤマ)	那須*
鹿沼 <sup>△</sup>	塩谷*(シオヤ)

## 目録における漢字取扱いの問題点

真岡(モオカ)

安蘇<sup>△</sup>(アソ)

以上の2例から、小さいファイルでは気が付かないけれども、10万近い人名ファイルでは地名と一致する形がかなり多くなりそうである。

従って、単に形を論ずる(字と読み)場合は、地名は人名と一しょに考えるべきであるが、逆に検索ファイルとしては、あるいは人名と地名は別にしたほうがよいのではないかとも考えられる。団体著者との関連も考えなければなるまい。

### B. 件名ファイルでは

件名ファイルは、いわゆる“情報検索論”の側では、キーワード、デスクリプタ、シソーラスなどの語が、不用意に、非体系的に紹介され、当然のようにこれを検索の手段とするファイルが論じられている。これらの概念・用語を統合したものを考察することは別の機会にゆずることとして、ここでは件名ファイル(件名標目をもっていたファイル)ということとする。

一つの統制語彙(索引・検索用の)として、B. S. H. を具体的に考える。この“表”自体はかな排列(ただし、ふりがなは6字打ち)になっているから、件名標目自体を見出すのに、多少の緊張と手間を要する場合がある。ここでも、“かの部”を材料とする。

#### 1. B. S. H. の標目の漢字排列の試み

B. S. H. “カ、ガの部”は25ページにわたり、全体342ページの7.3%に当り、“シの部”に次いで多い部分である。これがふりがな(カタカナ)棒読みのかの排列になっているために、1音の“か(蚊)”が最初にあり、カンワジテン“漢和辞典”が最後にくるのは動かないとしても、その中間でどのような排列が見やすいか、たとえば頭音頭字による漢字排列法はどのような形になり、どのような条件下で、検索し易いものとなるか、考えてみたい。

“かの部”は全体で、標目276箇、参照187箇、計463の見出し語がある。このうちには、ひらがな書きのもの、カタカナのものが若干ある。なおこのほかに、“アの部”にはI E, I M F, I L O, I Cのようなローマ字書きのものもある。

これらは別に考えることとして、漢字を用いる標目および参照の排列に、「電話帳式」を適用するとどうなるか、いくつかのグループにわけると、

(カ)の音をもつ漢字は次の12箇が用いられている。

化	花	河	貨
火	価	科	過
仮	果	家	歌

もちろん1字(1音)のままで標目に用いるものではなく、必ず2字以上の連字として用いられる。“化”を例にとれば、

化	化学
	化合物
	化石

このうち“化学”はさらに、2次結合がおこり、

- (i) 化学—実験  
化学—定数表
- (ii) 化学者
- (iii) 化学機械  
化学研磨  
化学工学  
化学繊維  
化学繊維工業

という形で、2字づつの連字が2段・3段と連結されるのが、最も一般的な形のようにである。学～学校～学校新聞などの連鎖もこれに属する。

(カ)の1音を有する12の漢字が、実際には漢字2字以上、音ではふつう3字以上で一人前の標目たり得るのであるから、頭字漢字からみればかな排列は順序、グルーピングが不同に見える。( )は参照標目。

価格	科学
化学	家具
科学	(学生)
雅楽	(活字)
花卉	火山

漢字排列のために、上記12箇の(カ)音単字を2字(以上)標目への見出し字として用いると、次のような排列となる。

化	化学	〔化学を冠する2次結合形〕
	化合物	
	化石	
火	火災	〔火災を冠する2次結合形〕
	火山	
	火星	
	火薬	
	火力発電	



仮

仮面  
仮釈放

花

花卉〔卉は表外漢字〕  
花壇  
花鳥画  
花道  
花粉

価

価格  
価値(経済学上の)  
価値(哲学上の)

果

果実  
果樹  
果汁〔汁は表外漢字, 補正資料にあり〕

もちろん, 参照もこれに準じて入れる。また, 地名を入れることとすれば, やはり, 同じように,

加

加賀市 カガ  
加古川市 カコガワ  
加西市 カサイ  
加世田市 カセダ  
加須市 カゾ  
加茂市 カモ

とグルーピングして, 火と仮の間にまとめて入れる。

“家”は家族, 家畜, 家庭の2次結合が著しく多い例である。

この方式では, (カイ)音の頭字が(カ)音のあとにつづくことになるが, 個々には, 同じ扱いをする。(カク)音がこれにつづく。

回

会〔会計, 会社などの2次結合あり〕

海

開

階

外〔外国の2次結合あり〕

各

核

学

学では(ガク)と(ガツ)が一しょにできるので見やすいはずである。かな排列では, 学力検査からまる2ペー

ジとんで学級経営, 学校となっている。

頭字は一応その音(訓)で排列するわけであるが, とくに字音の場合, 同音が多く, 同音字を排列する絶対的基準がないのが, 漢字排列法の最大の欠点である。上記では, 「当用漢字音訓表」の順を用いた。これでも, 人名(地名)ファイル, 書名ファイルに用いられる可能性の高い表外漢字, 特殊な読みについて, 十分対応できるかどうか, 今後の検討を要する。

とくにカード目録の場合には, かなりの補助装置を用意しなければならないであろう。たとえば単字見出カード(又はリスト)など電話帳, 学会名簿は姓のみ, しかも現存者の姓に限られるが, その「索引」のつくり方は注目に値すると思われる。

## 2. 「岩波講座 世界歴史 総目次 総索引」の方式の検討

これは「世界歴史」全29巻に対する総索引である。その目標は

- (i) 歴史的な・あるいは歴史認識にかかわる・または歴史研究の作業の中での・諸概念を, おのおのの構成と相互の関連とに即して整理することにより, 概念表の基礎的素材を用意する。
- (ii) 二人以上の執筆者が言及している・または二つ以上の執筆分担部分において言及されている・名称や名辞について, それらの出現箇所を検索する装置をととのえることにより, それらの名称や名辞の同定を可能にし, また諸執筆者の論述における問題関心の交叉を点検できるようにする。

と, 大へん長い引用になったが, 索引論の根本にもふれるような, 高い目標がかかげられている。もちろん, その精細な点を追求することは難しいが, 型的に大へん新しい工夫がなされていて, 重要な示唆となるものと考えられる。

全体の構成は“1次的項目(見出し項目=親項目)となったものは, 読み方にしたがって50音順に配列…構造上または内容上の2次的, 3次的諸項目はかならずしも50音順に並べられておらず, むしろ意味に応じて配置したという。

例1. 藍, アイ, インディゴ ⑦148 ⑧334…

——の反乱 ②193; ——プランテーション

→プランテーション

インディゴ → アイ (藍)

- 例 2. 医\*\*学, \*\*術 (中国の) ⑤298 ⑥104 ⑨389  
⑬35; (ラマ教の) …; (古代オリエントの) …;  
(アラブの) …; (近代ロシアの) …; ⇨ 疫病,  
病気  
\*\*師, \*\*者 ②410; 外科\*\* ①155; 軍\*\*  
⑩75; 獣\*\* ①155 \*\*学校 ⑧243

例 1 は殆ど説明を要しないであろうが, 見出しに同義語を連書した点は面白いし, 執筆者の用語を反映しているのかもしれない。ここと, インディゴの項にある黒矢印は see ref. である。白矢印は see also ref. である。(例 2)

例 2 で一種の“漢字見出し”主義が, フリーに活用されている。二つ星は上ツキと中ツキとを使いわけ, 医\*\* はここから後が切れること, \*\*学は先行の頭字を受けることを示す。

- 例 3. 王 ▷王位, 王権, 王国, 王室, 王制, 王朝,  
王党, 王有, 王立, 王領; ⇨ 勤王, [尊王]攘夷  
(古代オリエントの); (バビロニアの); (ゲル  
マンの); (フランク人の); (イングランドの);  
(朝鮮の)  
(牧人としての)  
神——, =理念/——の神格化  
▷ は独立の見出しがあることを示す。

この王の項目はほとんど 2 ページにわたり, pin-point search よりもむしろ「読みすすまれる」ということを予期しているからであるという例になろう。即ち, 歴史学において, “王” の概念は表面的には (古代オリエント), (マケドニア), (ゲルマン), (朝鮮) … と個別的に表われ, これを通ずる概念として, 読者が探る手がかりを与えるものと思われる。型式的整序を索引において行なうことは避けたのであろう。“階級” も 2 ページにわたり読み進むようになっていく。“革命” は 5 ページ近くを占めている。

これに対して, 個人を示すものは pin-point search の典型として,

- 例 4. カイヨー Joseph Caillaux ②238, 245 ②473-  
74 ②223  
海陵王 ⑤54-56, 241, 472

のように簡単であり, 今回の参考にはならない。

いま, さきに試みた漢字見出し方式にやや近い形をもつ項目を二三あげてみよう。

- 家 ▷家産, 家臣, 家族, 家畜, 家父長; ⇨ イエ  
(家)

- 長 ③145…; ⇨ 家父長  
——父 ②100 ⑦382-383…  
——門/ = 勢力/ = 権力/ ——格 ⑤160…;  
大——(高句麗の) ⑥5-6  
——系 ; ——籍 ; ——譜  
——計  
——政/ = 機関; = 学  
——領  
——禄/ = 処分 (日本の)  
——人/ 帝国 =, 皇帝の = (中世ドイツの)  
——内工業 → 工業; ——内手工業 → 手工  
業; ——内労働/ = 者 ①143…  
歌, ——謡 … ⇨ 民〔謡〕; 雅—— ⑭406;  
童謡 ②342  
民族 [の] —— ; 郷 —— → キョウ (郷)  
——劇 (中国の); ——舞

この 2 例では, “家” は直接の記入はなく, 複合形への案内のみにとどまっている。“歌” の場合は, 直接索引であるとともに, 複合形を誘導する。——は見出字のくりかえし記号, = はその 2 次複合形を示す。

例 2 の\*\*や, 上の——のように, 漢字見出しの特色がよく表われている。しかし\*\* の場合, 医\*\* でひいて軍\*\* として軍医が見つかるが, 軍の項目では見つからないなど, まだ使いなれが必要のように思われる。

項目の内容は残念ながら“世界史” であるから, 統一がとり難い点が多かったと思われ, また外国人名, 地名は, 今回の考察の役には立たないが, 例 2, 3, 家, 歌などの例は, 少なくともこのような冊子体の, 従って一覧性の高い索引では漢字排列が機能し得ることが示されているとしてよからう。

さらに, “案内字” 機能を完全にすることも, 若干の改良になるのではあるまいか。たとえば, 保を冠する見出しは:

- |    |         |
|----|---------|
| 保  | 保守/ ——的 |
| 保安 | 保障      |
| 保険 | 保証      |
| 保護 | 保有      |
| 保甲 |         |

このうち, 筆者の知識で歴史的と思われるものは保甲のみであり, あとは極めて一般的かつ抽象的な用語であって, 各項目内では“読みすすんで” いくとわりあい見当がつくものが多いが, いかににも予測性に乏しい感がある。保の案内字のもとに ⇨ で全部を提示しておくこと

によって、より使いやすくなるであろう。

### C. 書名の取扱い

ある調査によると書名目録が最も多く検索に用いられているというが、これには種々の疑問点があり、そのままで一般化することは危険であると思う。もちろん、特定化された書名の pin-point 検索に役立つのは明らかである。

また、**「都立中央」目録の「書名索引」**を利用して頂くこととする。これは116ページにわたり、ページ当り130タイトルとして15,000タイトル程になる。

人名(地名)ファイルにおいては、大体2字がいわゆる“検索の第1項目”となること、同様に、件名標目においても、2字またはその2次結合(細目又は直結)という型があった。しかし書名にはこのような整一なものが明らかでない。

約15,000タイトルのうち、最初の2字で最も多い結合形は“日本”で約660ある(約4%)。これは当然、日本に続く部分で検索しなければ、識別の効果が無い。そのうち比較的まとまった組合せは“日本経済”があり62タイトルにのぼる。あとは、熟したものとして日本語と日本人とがある。

形としては、“日本の○○”というものがかなり多い(216点)。案外なのは、日本を冠する団体名が結構多いことである。

日本育英会年報  
日本勧業銀行七十年史  
日本共産党 他6点  
日本銀行 2点  
日本郷友連盟十年史  
日本雑誌協会史  
日本雑誌協会十年史  
日本歯科大学和洋雑誌目録  
日本社会党論 2点  
日本住宅公団業務年報 他1点

(下略)

年史、年報の類は書名といえど書名であるが、目録上の疑義も大きく、団体著者との関連で決定すべきであろう。

“日本”に次いで多いのが“現代”である(532点)。ついでは“新”(190点)、“新しい”(111点)があり、さらに“近代”がつづく。“会社”は72点ある。

新、新しい、現代、近代などはわかりやすい言葉であ

るけれども、厳密に言えば主題をあらわす語ではない。“日本”もこれに近い。書名を主題的検索、主題検索に準ずる検索に用いる場合にはあまり、役に立たない。

これらとの対照的なグループとしては、主題用語が最先に出てくる形式の書名である。

外交史  
外国為替  
海上保険  
学習心理学  
革命  
家族

などはB.S.H.そのままといってよい。このような書名だけを扱うのなら、前述の件名標目に関する論議が適用できそうである。“新しい”などという扱いにくい言葉はさておき、件名標目ベッタリよりも多少軟かい形までとらなければ書名は扱えない。

いま(ガク)の音の字から始まる書名を見ると、頭字として次の字が使われている。

核  
学  
各  
革  
覚(1回だけ)  
確(1回だけ)

学(ガッ)として(カチ)のあとにもう一度出現するが、殆ど学級か学校である。

核は“核家族”の場合のみが異なる意味をもち、他はすべて原子核あるいは原子力の象徴としての“核”である。革命と核と学生とが混排されているのは正に時代の反映であるが、ここでは漢字頭字排列が有効であると思う。もし件名ファイルが作られる場合、これとの競合、作成労力の節約などの問題も起きて来よう。

団体名とのアナロジーで、地名もまた書名の頭によく出てくる。

愛知県	阿波	愛媛
青森県	伊勢崎	青梅
秋田	茨城	大隅半島
尼崎	岩手	沖繩
天草	江戸	
奄美(大島)	恵庭	

先に地名ファイルのところでも失念したので、ここで述べるが、BSH p.27で“人名、団体名、地名、その他の固有名詞……著者標目の形式と一致させる。現在では

## 目録における漢字取扱いの問題点

“日本目録規則 1965年版”によることが望ましい。”となっている。著者標目と一致させるためには、著作者たり得る地方自治団体名に限られ、これはいわゆる“地名”ではない。これは地名を表わす件名標目として全く間違った考え方である。次の書名がこれを明らかにする。

秋田県の中小企業協同組合等のあゆみ  
秋田県の民俗  
秋田のわらべ歌  
秋田マタギ聞書  
秋田むかしこ

書名には人名、地名、件名の要素が入る可能性が高いと同時に、“新しい”とか、“入門”、“図説”“これからの”などという形式語を冠するものも少なくなく、大へん雑多であるが、これも、検索者の“馴れ”を計算に入れれば、漢字排列が不可能ではなく、また“なるべく早く漢字で呈示する”という原理は、姓名に比して長くなりやすい書名について有効であると思う。

古書の書名については、今回は手が出なかった。古い著者名も同じ状況にある。

## V. ま と め

図書館の目録を、予め検索語によって厳密に排列したファイルと規定し、一方、検索者は、当用漢字及び音訓表をあまり超えない言語能力をもつと仮定する。すると、予め“正しく”ふりがなをつけたファイルといえども、検索者がすべてについて“正しい”読みを知っているとは限らないために、検索不能になるおそれが常に存在する。

とくに読みを一義的に決定できないものが多いのは人名・地名であると推定される。逆に、人名・地名以外の件名標目は比較的当用漢字・同音訓表に収まりやすいと考えられる。故に、とくに接近補助装置を必要とする人名・地名ファイルは、件名ファイルとは別に構築するのがシステム管理上も、利用上も便利が大きくなるのではあるまいか。

読みの不確定性は漢字に起因するのであり、これをそのまま吸収し、日常の言語行動に特別の緊張を強制しないためには、漢字排列・検索システムを考える余地があると思われる。

その準備として、姓の使用度数分布などにより、同等に2通りに読まれる場合と、一方が圧倒的に普及し、他方が例外的な読みにすぎない場合などを明らかにし、これに応じた案内カードを用意しなければならない。

漢字自体は排列の絶対基準がない欠点があり、これをたとえば頭音頭字によって音訓表順に固定して、人名ファイル、件名ファイルを通じての排列原理とすれば、ファイル間の統一はとれ、ある期間をすぎれば、馴れと、共通性が生れるのではあるまいか。

漢字排列は、冊子体目録、索引・書誌等においては、カード目録よりも、より adaptive に作用・利用できそうである。

- 1) 「文化庁. 児童・生徒の読み書きの力——当用漢字について——, 東京, 大蔵省印刷局, 1972」によると、中学3年生で、1668字の読み能率 78.9% となっている。このほか、人名用漢字および地名に用いられる表外漢字の読み能力も意外に高いものがある。
- 2) “Entry” および “Heading” なる用語は目録の基本用語であるべきだが、*Anglo-American Cataloging Rules, 1967* の North American Text と British Text とでは、“Glossary”における定義が著しく相違するのみならず、*A. L. A. Cataloging Rules...*, 1949 のそれとも異なっている。筆者の用法は British Text の定義に近い。
- 3) 丸谷才一. 日本語のために. 東京, 新潮社, 1974. p. 92.
- 4) 塩田紀和. 日本の文字とことば. 東京, 国土社, 1970. p. 139-140.
- 5) 岩淵悦太郎. 現代日本語. 東京, 筑摩書房, 1970. p. 165.
- 6) 文献(1)でも、2字語の読まれ率が、単字(とくに訓よみ)よりはるかに高い例が少くない。たとえば、“異常” 95% 読む, 中3; “世の常” 77.6% 読む, 高1。
- 7) Trudgill, Peter. *Sociolinguistics*. Harmondsworth, Eng., Penguin, 1974. p. 129-156.
- 8) 文部省情報図書館課. 昭和47年度大学図書館実態調査結果報告. 東京, 1974. p. 44-45.
- 9) 日本図書館協会. 日本の図書館 1973・1974. 東京, 1974. 192 p.
- 10) 鈴木孝夫. 閉された言語・日本語の世界. 東京, 新潮社, 1975. p. 95.
- 11) 柳田国男. 地名の研究. 東京, 角川書店, 1968. (角川文庫) p. 224-227.